

# 海外で学ぶ初級日本語学習者を対象にしたオンライン国際交流会

— 日本語を実践的に使える場を作るために —

An online exchange meeting with foreign preliminary Japanese education students

— To create a place to use Japanese practically —

国際・教養教育センター

安原 凜

YASUHARA, Rin

Center for International  
and Liberal Arts Education

国際・教養教育センター

尹 帥

SHUAI, Yin

Center for International  
and Liberal Arts Education

**要旨：**2019年から世界中でCOVID-19の感染が急拡大したことにより、本学の別科生も入国が叶わなくなり、母国で日本語を学習せざるを得なくなった。そこで、授業外でも日本語を実践的に使える場を作りたいと考え、NZにある本学の姉妹校と合同でオンライン国際交流会を開催することにした。本稿では、2021年度前期に開催したオンライン国際交流会と交流会までの約2ヶ月の準備期間が別科生に与えた教育的効果を調査し、別科生を対象に実施した事後アンケートとフォローアップインタビューを基に、考察した。その結果、本交流会までの準備期間でチームワークの精神を養うことができ、本交流会を通して日本語の口頭運用能力に自信が持てるようになったとの声が多く寄せられた。しかし、交流会で自由に話す時間が欲しかったとの声もあり、交流会の内容を再考する必要があると考える。

**Abstract :** Because of the COVID-19 virus rapidly expanded all over the world, the international students of IPU became impossible to enter Japan from 2019, and they forced to learn Japanese in their mother country online. We want to give them the chance to use Japanese practically outside the class. We decided to hold an online international exchange meeting with my sister university in New Zealand. In this paper, we considered the effects of the international exchange, post interview and follow-up interview. As a result, we found it is possible to cultivate the teamwork spirit in preparation and our students become confident in the using of Japanese through this exchange. However, we also hear that the students wanted more time to talk freely. We think it is necessary to reconsider the content of this exchange meeting.

**キーワード：**JFL環境、口頭運用能力、オンライン国際交流会、初級日本語学習者

## 1. はじめに

2019年から世界中でCOVID-19が猛威を振るい、感染が急拡大し、留学生たちの入国が叶わなくなった。その後、一定期間渡航制限が緩和されることはあったものの、新たな変異株の出現により、2021年12月現在、留学生を含めた全ての外国人の新規入国が原則として禁止されている。

本学留学生別科（以下別科と称す）に所属する別科生たちもCOVID-19の影響を受け、母国でオンライン

授業を受けることを余儀なくされた。JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境で日本語を学習する場合、授業以外に日本語を使用する機会がないため、JSL (Japanese as a second language) 環境に比べ、日本語の習得に時間がかかるといわれている。本学の別科でも、日本で学習していた別科生に比べ、母国で学習していた別科生たちには、(1) 日本語口頭運用能力の低下、(2) 日本語学習への動機付けの維持が困難という2つの課題が強く見受けられるようになった。

(1) に関しては、日本語の語彙文法の定着が悪く、運用できるには至っていない様子が見受けられるようになった。さらに、別科生たちが本科に入学するためには面接試験に合格する必要がある。しかし、面接試験の準備段階で、面接原稿を覚えるのに苦労する学生、覚えたとしても覚えたことを話すのに精一杯で、うまく日本語でコミュニケーションが取れなくなる学生がみられた。また、(2) に関しては、JFL環境で学習する場合、授業外に日本語を使用する場がないことが、日本語学習の動機付けに与える影響を危惧していた。なぜなら、学んだことがすぐに使える環境にいないことや、リアルなコミュニケーションができないことなどを理由に、学習意欲が低下し、授業中に教員の話の聞かずに他のことをしていたり、宿題の提出率が悪くなったりする学生がみられたからである。李(2003)では、JSL環境の韓国人日本語学習者139名とJFL環境の韓国人日本語学習者164名を対象に、日本語学習の動機付けと、動機付けを高める要因(学習への取り組み方、日本語能力の自己評定)や経験要因(滞在期間・滞在経験・訪日経験)との関連性を検討した。その結果、JFLの学習者はJSLの学習者より動機づけが高いことが明らかになったが、動機づけが持続しないことがわかった。その理由の一つは、JFLの学習者はJSLの学習者に比べて、自己効力感を感じにくいということである。JFLの学習者の高い動機づけを維持させるためには、JSLの学習者のように、学習者が自己効力感を感じやすいような環境作りが必要であると述べられている。そこで、以上の2つの課題を解決するために、JFL環境の学習者が日本語を実践的に使える場を作る必要があると考えた。

一方、ニュージーランド(以下、NZと称す)には本学の姉妹校があり、JFL環境でNZの学生と留学生が日本語を学習している。日本語をより実践的に使える場を作りたいという本学別科とNZの姉妹校の目的が合致し、2021年度前期に初級日本語学習者同士のオンライン交流会を実施することになった。本研究ではオンライン交流会及び、その準備期間において初級日本語学習者同士を交流させたことが、別科生にどのような教育的効果を与えたのかを事後アンケートとフォローアップインタビューを基に、考察する。

## 2. 先行研究

国際交流会といえば、留学生と日本人学生との異文化交流を思い浮かべることが多いだろう。稲葉

(2018)では、国際交流会等を実践的な学びの場として活用する方法を模索するために、交流会の立案から実施までを学生が企画するというプロジェクトを実施し、教育的効果を分析した。その結果、学生は、1) 企画・実行する際に大切なことや考慮すべきこと、2) コミュニティは言葉以外でも可能で、伝える気持ちが大切であること、3) より深いコミュニケーションには言語が必要であること、4) 異文化や自文化について学ぶ意義、5) 国際交流は楽しいものであること等を体験的に学んだことが明らかになった。神谷・中川(2007)では、日本人学生と留学生の「協働的活動」、対等な立場で信頼関係を構築し、協働で課題遂行することを目指す活動により、双方が文化的葛藤を経験しながらも自己成長を遂げていることが示唆された。河崎(2020)では、日本語母語話者である大学生と日本語学習者(国内、ベトナム、インドネシア)との交流の場を設け、その交流が学生へ与える効果を検証したところ、異文化に対する探究心や「外国語としての日本語」を認識させ、この気づきが外国人に対するステレオタイプを払拭させたことがわかった。

しかしながら、留学生同士を交流させ、その効果を検証した研究は管見の限り、見られなかった。したがって、本研究ではオンライン交流会及び、その準備期間において初級学習者同士を交流させたことが、別科生にどのような教育的効果を与えたのかを検証したいと考えた。

## 3. 日本語を実践的に使用する場

### 3.1. オンライン国際交流会の内容

本研究では、この交流会、事前交流会、交流会までの準備期間の場を、日本語を実践的に使用する場と位置付ける。

交流会はZoomで行い、3～5名のグループを別科、NZでそれぞれ3つずつ作り、「自国か自国の町のおもしろい文化や習慣」について10分間プレゼンテーションをさせ、2～3分聴衆からの質問に答えることにした。このテーマを選んだ理由は、日本語を共通言語にして日本以外の国の文化を学ぶ機会を作り、異文化理解の促進を図りたいと考えたからである。前半は別科の3つのグループがブレイクアウトルームに分かれNZの学習者が聴衆となり、グループごとにブレイクアウトルームを移動し、全ての発表が聞けるような形式で運営した。後半は発表者と聴衆を逆に行い、

最後に別科とNZ双方で一番良かったものに投票することとした。

### 3.2. オンライン事前国際交流会の内容

初対面の人の前でプレゼンテーションをするのは初級日本語学習者にとってハードルが高いことだと思います。交流会の1週間前に顔合わせの機会を作ることとした。目的は交流会の相手がどんな人か、どのくらいの日本語レベルなら伝わるのかを知ること、そして可能であれば良好な関係を築くことである。

事前交流会は、交流会と同様のZoomで行い、4～5名のグループに分かれ、グループ会話を20分行った。会話のトピックはその時点のNZ学習者の既習課に合わせ、「自己紹介」、「好きな食べ物・嫌いな食べ物」、「家族構成・ペット」とした。

交流会後、すぐに別科生たちに感想を聞いたところ、「楽しかった」、「日本語で話せて良かった」と笑顔で話してくれた。

### 3.3. 交流会までの準備

別科生に交流会を実施することを伝えてから、交流会まで約2ヶ月準備期間があった(表1)。4月30日に交流会の概要を説明してから、交流会までに、授業の中で7回、1回約1時間のグループセッションを設けた。グループセッションの間、教員は通訳の先輩学生と共に、各グループを回り、進捗状況の確認、助言、質問対応を行った。グループでコミュニケーションがうまく取れないなどの問題があった際には、この時間に通訳付きで対応した。

役割分担や具体的な作業のスケジュールについては、各グループに任せた。しかし、本交流会で学習者に成功体験を積み、自己効力感を高めてほしいと考えていたため、教員は発表資料や発表原稿については、何度も指導し、交流会の約1週間前の6月17日には、交流会模擬発表会を行った。尚、別科生たちはこの時間以外にも自主的にグループで、オンライン上で集まり、話し合いや発表練習を実施している。

表1 交流会までのスケジュール

日程	時間	内容
4月30日	1時間	・交流会の概要の説明 ・グループメンバーの発表 グループ作業① ・自己紹介、リーダーの決定 ・発表テーマの話し合い
5月7日	1時間	グループ作業② ・発表テーマの決定 ・今後のスケジュールの決定 ・役割分担
5月14日	1時間	グループ作業③ ・発表内容を作成 ・パワーポイントの作成
5月21日	1時間	グループ作業④ ・パワーポイントの作成
5月27日	1時間	・教員がパワーポイントを確認 ・パワーポイントの作り方と発表の仕方の注意 グループ作業⑤ ・パワーポイントの修正
5月28日	1時間	グループ作業⑥ ・パワーポイントの修正 ・発表原稿の作成
6月11日	1時間	・教員が発表原稿の修正 グループ作業⑦ ・発表練習
6月17日	1時間	交流会模擬発表 ・1グループずつ発表、聴衆が質問 ・教員のアドバイス ・学習者同士で評価シートを使用し、互いの発表を評価し、コメントを書く (後日、教員が評価シートを学習者に共有)
6月18日	30分	オンライン事前国際交流会
6月25日	2時間	オンライン国際交流会

## 4. 調査

### 4.1. 調査の目的と概要

調査の目的は、オンライン交流会及び、その準備期間において初級日本語学習者同士を交流させたことが、別科生にどのような教育的効果を与えたのかを明らかにすることである。交流会後すぐに別科生13名(ベトナム10名、中国3名)を対象に、5件法と自由記述形式のGoogle Formアンケートを実施した。中国人学生1名からは回答が得られなかったため、12名分のアンケートを分析対象とする。アンケート項目は表2のとおりで、全て母語に翻訳し、回答も母語でも可とした。その後、詳細を聞いてみたいと思った別科生数名に母語の通訳をいれ、フォローアップインタビューを実施した。インタビューは調査協力者の承諾を得て録音した。さらに分析の際には、筆者の授業記録も参考資料として適宜参照した。以上の調査は全て事前に調査対象者に承諾を得た上で行った。

表2 アンケートの調査項目

	質問内容	回答形式
1	交流会は楽しかったか どうして「1の答え」だと思ったか	5件法
2	交流会の準備で大変だったことや、困ったこと	自由記述
3	交流会の準備や今日の交流会を通して勉強になったこと	
4	交流会を通して日本語でできるようになったこと	
5	交流会の改善点	
6	また交流会があったら参加したいか	5件法
7	次の交流会で、どんなことをしたいか	自由記述

## 4.2. 調査結果

### 4.2.1 交流会の感想

交流会の感想について、「とても楽しかった」「楽しかった」「どちらともいえない」「あまり楽しくなかった」「全然楽しくなかった」の5段階の選択肢から最も適切だと思うものを選んでもらった。

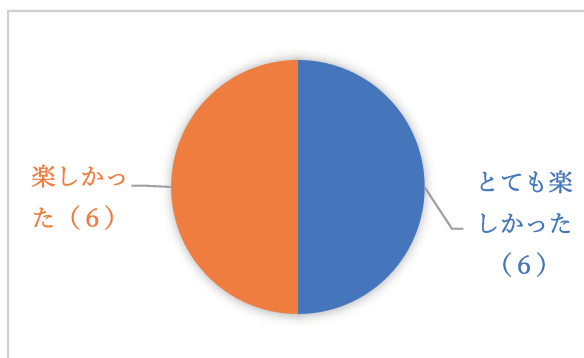


図1 交流会の感想

その結果、12名全員が「楽しかった」と答え、その中で6名（50%）の別科生が「とても楽しかった」と回答した。その理由を自由記述で回答してもらったところ、「先生や他の国の友達と交流できる機会があったから」のように「交流」について触れた学習者が4名と最も多かった。続いて、3名が「新しい仲間/友達ができた」、「内容が面白かった」と回答した。さらに1名ずつではあるが、「NZについていろいろなことが知れた」「プレゼンのチャンスがあった」と書いていた。

一方、1名が「交流会の雰囲気が盛り上がりすぎて楽しかったが、静かになることもあった」とネガティブな感想を書いていた。この学習者にフォローアップインタビューで詳しく聞いたところ、「相手の発表内容が理解できなかったので、質問することができず、質問の時間に静かになることがあった」そうだ。

初級学習者同士の交流会である点に配慮し、質問が難しい場合は感想でもいいこととし、事前に質問の練習もしておくべきだったと考える。

### 4.2.2 交流会の準備で大変だったことや困ったこと

別科の3つのグループのうち2つのグループが、ベトナム人学習者と中国人学習者の混合グループだった。混合グループの別科生の回答には、「多国籍のグループワークは初めてだったので、内容の交換と連絡に困りました」「グループの中で交流するのは難しかったです」との回答があった。

共通言語が日本語しかなく、その日本語さえも初級レベルであることから、コミュニケーションを取るのが難しかったことが窺える。実際に、発表資料のビデオを作る際に、初めに注意事項を確認したが、その内容がうまく伝わっていなかったのでビデオを撮り直すことになるという問題が起こった。加えて、混合グループが最も苦労していたのが、密に連絡が取れる手段がなかったことである。ベトナム人は普段Facebookメッセージを使用しているが、中国人はWeChatを使用している。共通の連絡手段がなかったため、初めはGmailを使用し連絡を取り合うことになったが、中国人にはGmailの通知がいかないため、連絡に気づかず中国人学習者から返信が来ないという問題が起こった。グループ作業の時間に教員と通訳担当の先輩が間に入り、中国人学習者がGmailを1日に1回は確認するという事に落ち着いた。

また、「準備の段階では、困ったことがあります、先生が助けてくれて、いい発表ができました」という回答もあった。このグループは全員ベトナム人学習者で構成されていたが、学習者のルーズな性格から返信がないことや約束していた学習者同士のミーティングに来なかったこともあった。教員が間に入り、指導したため、改善された。

1名から「ビデオを作るのが難しかったです」との回答があった。パワーポイントを使用したプレゼンテーションをするよう伝えたが、1グループが映像のほうがたくさん情報を伝えられるため、ビデオを作りたいと申し出たため、許可した。しかし、教員がビデオの作り方を教えたわけではなく自分たちでビデオの作り方を勉強し、作ったため、このような感想ができたのだろう。

その他、「日本語が弱いから、内容の準備の段階から困りました」「相手にどのような質問をされるかを考えることや質問を準備することは難しかったです」という回答もあったため、テーマの難易度を下げ、事前に質問の練習をしておくべきだったと考える。「ありません」と回答した学習者が、3名（25%）いた。

事前準備以外に当日困ったことを書いている学習者



もいた。「たくさん練習したのに、話すときはうまく話せませんでした」「発表で結構緊張しました」「発音が綺麗ではありませんでした」「Wi-Fiが悪かったから、ビデオがはっきり見えませんでした」という回答だった。

#### 4.2.3 準備や交流会を通して勉強になったこと

交流会の準備を通して勉強になったことでは、「チームワークの精神」について記述した学習者が3名で最も多かった。他には「言語が違う相手と一緒に任務を完成すること」「積極的に他のメンバーとコミュニケーションを取ること」など、国籍が違う学習者同士をグループにしたことが、大きな学びにつながったようだ。また、「プレゼンテーションのやり方」「内容の準備のし方」「スライドの作り方」などプレゼンテーションについて記述した学習者、「新しい言葉と文法を学びました」「自信を持って、日本語が話せるようになりました」と日本語力の向上を実感した学習者もいた。

交流会で勉強になったことでは、NZ側の発表から、「NZの習慣を知りました」「他の国の文化が分かりました」「NZのお祭りと観光地が分かりました」との回答もあった。1度の交流会より交流会までの約2ヶ月間の準備期間について記述した学習者が多かった。また、「日本語で交流できること」との記述もあり、初級学習者にとっても本交流会が、日本語を使って課題を遂行する「実践の場」になっていたことが窺える。

#### 4.2.4 日本語でできるようになったこと

日本語でできるようになったことでは、「簡単な会話」「以前より少しだけ日本語が話せます」「前よりたくさん話せたこと」「日本語でプレゼンテーションができるようになり、友達に母国のことを少し紹介することができました」など日本語の口頭運用能力の向上を実感している学習者が8名(66.7%)と、最も多かった。次に「話し方を勉強すると思います」「発表のイントロダクションと簡単な導き方」のように、プレゼンテーションの進め方についての記述が多く、1名が「他のプレゼンテーションを聞くとき大体内容が分かりました」と聴解力の向上を実感していた。

#### 4.2.5 交流会の改善点

最も多かった回答は「なし」というもので、「とてもよかったです」「無事に行われたから、改善すべきことはありません」と、8名(66.7%)が回答してい

た。次に多かったのは交流の時間について記述したもので、「時間について、各グループの時間を増やしたほうが良いと思います」「もっと話せる時間が欲しいです」との回答があった。交流会の時間についてはNZ側の制約により今回はこの時間しか取れなかったが、2回に分けて実施するなど柔軟に対応する方法はあったのかもしれない。他には「Wi-Fiが悪い人がいましたから、聞こえるときと聞こえないときがあります」というインターネット環境の問題点、「自分の日本語能力がまだ弱いと感じます。言いたいことをどう表現すればいいか分かりません。NZの友達が理解できるかが心配ですから、自然に話せませんでした」と自身の日本語力に関する不安を問題点として挙げている学習者もいた。

インターネット環境の問題点はオンライン交流会にはつきもので致し方ないが、日本語力に関する不安は、発表テーマの難易度を落とすことや、発表の前にNZの学生ともっと交流させ、相手にどのくらいのレベルの日本語を使用すれば伝わるのかを実感させる機会が必要だったのかもしれない。

#### 4.2.6 今後も交流会に参加したいか

また交流会があったら、参加したいかどうかを「ぜひ参加したい」「参加したい」「どちらともいえない」「あまり参加したくない」「全然参加したくない」の5段階の選択肢から最も適切だと思うものを選んでもらった。

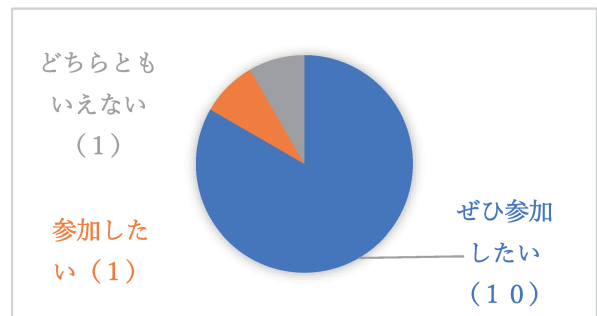


図2 今後も交流会に参加したいか

図2の通り、12名中10名(83.3%)の別科生が「ぜひ参加したい」を選択し、1名が「参加したい」、1名が「どちらともいえない」を選択する結果となった。「どちらともいえない」を選択した学習者は交流会の準備の際にもグループメンバーからの連絡にも返信しなかった学習者で、交流会だけでなく、普段の日本語の授業でもあまり積極性が見られなかった学習者である。

#### 4.2.7 次の交流会でしたいこと

多かったのは「もっと交流したい」「ゲームをしたい」との声だった。交流の内容は、「文化、服装、料理」で、ゲームの内容は、「日本の特徴について」だった。他には、「NZの学生と友達になりたいです」「先生と一緒に歌を歌いたい」「日本語の学習方法を教え合える機会を作ってほしい」「対面で交流したい」との声もあった。

#### 5. 教員による省察

本研究では、オンライン国際交流会と交流会の準備を通じて初級日本語学習者同士を交流させることでどのような教育的効果と課題があったのかを別科教員の視点から省察する。まず、交流会の準備段階では母語が違う初級学習者同士を1つのグループにしたことで、共通言語がなくコミュニケーションが取れなかったことがあげられる。これについては週に一度のグループ作業の時間に、ベトナム人留学生SA（チューデントアシスタント）と中国人教員がサポートに入り、困ったことがないか確認し、言語が通じないためにトラブルが生じている場合は通訳を入れて対応した。また、母語話者同士でも積極的にグループ作業に参加しない学習者が見られ、他の学習者が注意しても態度が変わらないことがあった。これについても教員からグループワークをするときの注意点を伝え、指導を入れたことで、改善がみられた。以上のように言語が通じないことで起きるトラブルや、グループワークに積極的に参加しない学習者には、教員の支援が必要になると思われる。また、交流会の当日も初級学習者同士で話をさせる場合は、学習者の性格や日本語レベルを考慮し、場を持たせるために適宜教員が入って話題を振る、学習者が理解できる日本語に言い換えるなどする必要があるだろう。

今回の交流会の効果として最も感じられたことは、日本語の産出がスムーズになったことである。別科生たちは交流会で発表原稿を作り、覚えるまで何度も話す練習をしてきた。その経験がその後の面接試験の際に役に立ったようで、例年より面接原稿を作成してから覚えて話せるようになるまでがスムーズだった。授業記録を参照すると他の教員から「今年の別科性は上手に話せる」との記入が見られた。

#### 6. まとめと今後の課題

2021年度のオンライン国際交流会までの準備により、別科生たちはチームワークの精神を養い、本交流会により日本語の口頭運用能力に自信が持てるようになった。したがって、本交流会の場で、大勢の前で日本語を使って発表するという成功体験を積ませることで別科生の自己効力感を高め、本交流会までの準備を国籍の違う別科生同士をグループにして行わせることで授業外にも日本語を使用する場を作り、日本語の口頭運用能力を高めたといえる。その一方で、時間的な制約があり、学習者同士で自由に話せる時間が取れなかった。今後は、交流会の開催方法や内容を再考し、海外で学ぶ学習者をつなぎ、日本語を実践的に使える場を作っていきたい。

#### 謝辞

本調査に協力してくれた別科生及び翻訳通訳してくれた留学生SAに心より感謝します。

#### 参考文献

- 稲葉みどり (2018) 「失敗に学ぶ成功への鍵－学生主導による国際交流会の企画と実践－」『教養と教育』18, pp.26-33.
- 神谷順子・中川かず子 (2007) 「異文化接触による相互の意識の変容に関する研究－留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果－」『北海学園大学学園論集』134, pp.1-17.
- 河崎絵美 (2020) 「日本語教育における「日本語交流会」の試論的研究－「オンライン日本語交流会」実施の有用性について－」『教職課程研究』31, pp.65-74.
- 李受香 (2003) 「第2言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較－韓国人日本語学習者を対象として－」『世界の日本語教育. 日本語教育論集』13, pp.75-92.

#### 付記

本調査は、2021年秋季日本語教育学会交流ひろばで発表した内容に、交流会までの準備期間における別科生を対象にした調査結果を補足し、大幅に加筆修正を加えたものである。